

### 3. 座談会の意義

#### (1) 移民の子どもとして生きること

イシカワ エウニセ アケミ

静岡文化芸術大学 文化政策学部  
国際文化学科准教授 (研究分担者)

今回の座談会は、参加した在日ブラジル人の大学生3名と高校生8名が日ごろ一人で悩んだり考えたりしていることをオープンに話し合える貴重な機会であったと言える。彼ら全員に共通する点は、ブラジルより日本の生活の方が長く、ポルトガル語より日本語の方が流暢である一方、日本社会では日本人として認められないといった矛盾を感じてきたことである。このような悩みを日本人の友人に話しても理解されず、また親に打ち明けても理解されない不安を抱えながら、日本社会に適応しようと努力をしてきたことがうかがえる。

また、彼・彼女らは在日ブラジル人二世世代の最初のグループでもあり、彼らと同じような境遇の人のモデルケースがまだ少ないなか、自ら日本での居場所の確保と将来の夢の実現にむけて進んでいることに注目すべきである。在日ブラジル人の大人たち、つまり彼・彼女らの親たちの大多数は非熟練労働者として工場で働いているため、多くの場合子どもの中では、「在日ブラジル人イコール工場での労働者」といったイメージが作り上げられているのが現状である。また、日本社会とブラジル人家庭の間で生きる子どもたちは、日常的に、日本語 x ポルトガル語、日本人の文化 (学校、友人) x ブラジル人の文化 (家庭) といった状況の下、二つの文化の間で生活をしている。

このような状況は、一般の移民家族では当り前の光景であるが、本人からすれば多くの悩みの元になることは間違いない。しかし、この座談会において、まず自分は何人であるのか、日本やブラジルについてどう意識しているのか、日本で外国人扱いされた経験の中でどう感じたのか、といった悩みや考えを互いに表現できたことを通じて、こうした状況は自分だけの問題ではないことが分かり、また同じ立場の人でも様々な考え方があると再確認できたことが一番の成果だったのではないかとと言える。

自分は日本人と変わらないという人もいれば、やはり自分はブラジル人である、または自分は両方であるという意識を持っている若者たちもいたが、いずれにしても今回の座談会を通して、以前より自分に自信が持てるようになったのではないだろうか。ブラジルの文化を背景に持つ仲間がおり、その特殊性を最大限に活かして日本社会で夢を実現する方向で進んでいく可能性が見えてきたことが大事である。

日本語とポルトガル語ができる場合、なおさら日本社会での活躍が期待される。ブラジル人であることは今まで悩みであったが、実は有利な様相であったことを彼・彼女らに認識してもらい、日本社会で堂々と自分の居場所を築き上げていくことを心から願っている。